

郷土を知る
むかしむかし
昔々の
そお市

第60回



古代の役人の落とし物

生涯学習課 文化財係 ☎ 0986-76-8873

古

墳時代が終わり、倭から日本へと国名が変わった古代の時代。日本では当時の先進国であった唐（中国）を手本とし、律令制度のもと新たな国作りが始まりました。天皇を中心とした中央集権国家として、国内の統制や地方の整備がとりわけ重要な事業となります。国内が国・郡・里の行政区に分けられ、曾於市がある大隅国もこの頃に成立し、現代に至るまで名前が生き続けています。

国内各地には国衙・国庁・曹司といった、現代で言う役所が造られ、多くの役人が勤めていました。これらの役人は官位令により階級や被服、持ち物が細かく決められており、中央から派遣された上級貴族出身の役人から、地元の有力者より採用された地方役人まで幅広い人材が登用されていました。市内の発掘調査では、まれに役人の持ち物が出土することがあります。写真の2点は提砥と呼ばれるもので、孔にヒモを通し、帯から下げていたものです。当時



左から提砥（末吉町前之迫頭遺跡）、提砥（大隅町西之園遺跡）、巡方（大隅町広津田城跡）

は書き物に木簡を使用していましたが、書き損じがあった時、木簡を削り取るための刀子（小刀）とセットになっていました。深緑色の正方形のタイルのようなものは、役人が締めていた石帯と呼ばれる革製ベルトの装飾品です。巡方と呼ばれるもので、上級の役人は金銀宝玉を用いていたことに対し、下級の役人は雑石を用



【アクセス】
実物は市埋蔵文化財センターに展示
曾於市大隅町野1946番地1

いていました。出土した巡方は碧玉製で、持ち主は下級の役人であったと考えられます。これまでの発掘調査で、古代の行政機関にかかる直接的な遺構の発見はまだありませんが、市内では古代以降の遺跡が増加し、新しい時代に準じていく様相がうつつうかがえます。